

## W. S. ジェヴォンズと「限界革命」

増澤 俊彦\*

図書館の特別資料として購入した「ジェヴォンズ・コレクション」<sup>1</sup>は、純粋経済学のみならず自然科学・論理学・統計学などの業績の他、社会改良家、政策アドバイザー、コンピュータのパイオニアとして多方面にわたり活躍したジェヴォンズの広範な分野での理論的な発展過程を跡付けるものでジェヴォンズ研究の貴重な稀覯コレクションである。本コレクションには、まず、1875年5月5日付 Girdlestone 宛ての8葉にわたる未公開のオートグラフが収められている。これはジェヴォンズの著書『論理学入門』についての意見に対する返書で8ページにわたりあらためてかれの論理が展開されている貴重なものである。

つぎにかれの経済学研究と多面的な業績を明らかにする初版・初期刊本28点が集められている。その中に『経済学の理論』1871年初版と第四版二刷とがある。『石炭問題』は1865年初版と第三改訂版があり、初版本は出版案内リーフレットが挿まれた珍重書である。かれの事故死により断片のまま残された遺稿『経済学原理』（Higgs 編）は重要な1905年初版であり、加えて刊行案内リーフレットが付けられている珍重本である。『科学

---

\*ますざわ・としひこ／政治経済学部教授／経済学

<sup>1</sup>明治大学図書館所蔵資料の請求記号・091.6/22//H, 099/4008~4009//H, 331.2/427//D, 331.7/168~185//D

の原理』1874年初版、第二版、『論理学入門』第二版、改訂新版、独版第二版、米版初版、歿後妻により発刊された伝記資料として基本的な文献である『ジェヴォンズの手紙と日記』(1886年初版)などジェヴォンズ研究に欠かせない重要な文献が収められている。

本コレクションは当時の経済学に対して新しい経済理論の建設を試みた限界効用学派の創始者といわれるジェヴォンズの理論の発展過程を辿ることができる資料・文献が網羅されている。かれの理論は今日では「限界革命」と呼ばれる経済学の実質的な内容の変更をもたらすものであった。

「限界革命」という用語は、通例、1870年代初めのほぼ同時期に活躍した3人の人物、ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスが「限界効用逓減の原理」をそれぞれまったく独立に発見したことに由来する。3人が、マンチェスター、ウィーン、ローザンヌという相隔たる知的風土の中で、同一の概念に偶然に出会うことができたということはだれの目にも不思議に思われるかもしれない。マーク・ブローグによれば、当時のイギリス哲学の功利主義的経験主義的な伝統、オーストリアの新カント哲学的な風土、スイスのデカルト哲学的な風土を考えると、経済学に効用革命を惹き起こすことができるほど、共通の要素を実際に備えていたわけではなかったのである。また新しい経済モデルの探求を促進するような真の知的危機意識はイギリスにも大陸にも存在しなかった。そればかりか、ドイツだけでなくイギリスでも、1860年以降新しい支持者を獲得してやまなかった代替モデルは、歴史的な方法を唯一の正しい研究方法と吹聴した歴史学派の経済学者たちであった。

その歴史学派の大立者のグスタフ・シュモラーに有名な「方法論争」を挑んだのがカール・メンガーであった。かれは、抽象的・遊離的な演繹法にもとづいて、「精密法則」を明らかにしようと努めていた。こうした論争が起こった時代に、それぞれ他の人とは無関係に、ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスは個人主義と主観主義の基礎のうえに、純粹経済学とも呼ばれた抽象的・理論的な経済学を再建しようと努力を傾けていた。この経済理論の刷新の試みにおいて、かれらは従来の供給の側面から価値や価格の問題に接近する代わりに、欲望や効用、つまり消費や需要の側面から論究する方針を取った。ひとたび欲求の強さや効用が価値や価格を決めるこ

とになれば、これを全部効用 (total utility) で考える代わりに、財の最終の増加分がもたらすところの効用、すなわち限界効用 (marginal utility) で考えざるをえなかった。こういう新しい分析道具を用いて経済理論の体系を築き上げていく際に、心理学や論理学や数学にも通暁していた限界主義の経済学者たちは、はじめのうちは主に心理学的なものに頼っていたが、やがて数学的な表現方法を借りて、精確な論述を期することになった。このような数学的な傾向はジェヴォンズ、そしてワルラスにおいて著しかった。

イギリスのケンブリッジ学派の巨匠アルフレッド・マーシャル (1842-1924) の同時代人たる W. S. ジェヴォンズ (William Stanley Jevons, 1835-1882) は、心理学、論理学、数学、天文学、気象学、化学、統計学など広範囲な分野に精通していたが、倫理的・心理的な快樂説の基盤にたつて、効用と使用価値の理論のうえに、交換と価格の決定理論を構築した。かれは『石炭問題』 (*The Coal Question*, 1865)、『経済学の理論』 (*The Theory of Political Economy*, 1871)、『科学の原理』 (*Principles of Science*, 1874)、『貨幣と交換の機構』 (*Money and mechanism of exchange*, 1875)、『国家と労働との関係』 (*The State in Relation to Labor*, 1882)、『通貨と金融の研究』 (*Investigations in Currency and Finance*, 1884) など多数の著作を著した。かれはマーシャルとは気質も生活環境も全然違っていった。81歳で亡くなったマーシャルは晩年「賢者または予言者の相貌」を呈していたが、ジェヴォンズは水泳事故のため47歳という若さで生命と仕事を絶たれたのであった。

ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズは1835年、リバプールで鉄商を営んでいたユニテリアンの家に生まれた。かれは、16歳のときロンドンのユニバーシティ・カレッジに入学したが、数学はもとより、化学、植物学、地質学など自然科学の分野に興味をもっていたといわれる。父の事業が経営難に陥ったため、オーストラリア行きを決意したジェヴォンズは、1854年シドニーの造幣局で分析官としての職を得て、そこに5年間滞在了した。帰国後ユニバーシティ・カレッジに復学し、経済学がかれの主要な関心事となった。1862年に開催された「イギリス学術協会」のケンブリッジ大会で公表された「経済学の一般的数学理論」は、やがて10カ年近い歳月を経て1871年に『経済学の理論』として公刊されることになる。マーシャルの『経済学原理』が刊行されたのが1890年であったから、ジェヴォン

ズの効用理論に関する所説はおよそ 30 年前に発表していたことになる。しかし、かれの最初の論文は当時すぐには世人の注目を浴びなかった。

限界分析の展開に数学的な手法を駆使したジェヴォンズは、主著『経済学の理論』において、つぎのように述べている。「経済学が一つの科学であろうとすれば、数学的な科学ともいふべきものでなければならぬであろう。…わたくしの経済学の理論は純粋に数学的な性質をおびたものである。…その理論は、富、効用、価値、需要、供給、資本、利子、労働などわれわれに馴染みの深い概念、その他の日常の営利生活に属する一切の量的な概念に微積分学を適用することにある。ほとんど他のあらゆる科学の完全な理論が微積分学の使用を含んでいるように、われわれもその助けなくしては、経済学の本当の理論は得られない。…われわれの学問は、それが単に数量を取り扱うことからいっても、数学的でなければならぬものである。いやしくも取り扱うところの事物に大小がありうる場合には、その法則およびその関係は本質的に数学的でなければならぬ。」こうして、需要供給法則とは、財の需要量、供給量、そして価格との関係において、変動する量の変動の仕方を表現するものなのである。

経済学をあらわす用語が Political Economy から Economics にかわったことに、近代における経済学の理論分析が進化し、精緻化された純粋の学問とみる考えがある。ジェヴォンズは『経済学の理論』の第 2 版 (1879) への序文で、経済学の名称の変更を提唱して、「些細な変更としては、例えば、私は Political Economy という名称を Economics という単一で便宜な名辞をもって置き換えた。私はわれわれの科学を示す古い厄介な複語名辞は、できるだけ速やかに解体されてしかるべきものと考えざるをえない。…ケンブリッジのアルフレッド・マーシャル氏もまたこれを採用した形跡がある」と述べたうえで、「もっとも本文においてはこの新名称を使用したのが、本書の表題を変更することは明らかに望ましくなかった」と述懐している。かれにとって、自分の理論そのものについて、「問題は、本書の中に与えられた理論が果たして真実であるかどうかよりは、むしろ真になんらかの新しいものが含まれているかどうか」なのである。

ジェヴォンズは「最終効用度」、「無差別の法則」、「労働と効用とのあいだの限界均等の法則」などのいくつかの概念を定めて、二人の個人のあ

いたの財の交換の理論や孤立した個人の行動に対する労働の理論を構築したが、それは社会全体に対する評価の理論というほど包括的なものではなかった。ジェヴォンズはまた、限界生産性の基礎にたつて生産要素の価格形成を理論づけるまでにはいたらなかったが、資本の迂回生産的な役割はすでに認識していた。分配の理論に関しては、包括的な理論を大成するまでにはいたらなかった。分配の理論の発展に対するジェヴォンズのおもな貢献は英国の経済学に生産性の増添という概念を導入して、初めて生産性の計算をダイアグラムに表示した点にある。ジェヴォンズは、このダイアグラムにおいて、労働は生産高の最終効用度が労働の最も苦痛の多い増添分に等しくなるところで雇用されると論じた。かれは、同時にまた、資本が資本の最終の増添分に資本の分量を乗じた積に等しい支払いを受けることを証明した。

かれはまた、景気の変動の説明に関して、平均 10 年半前後を周期とする気象学的な恐慌学説を提示した。いまでは「太陽黒点説」として知られている。さらに労働組合の行動について、かれは労働組合を独占をめざす動きとみながらも、これを禁止する代わりに、これに責任をもたせる方針を取るべきであると考えた。かれは熱烈な自由主義者であったが、便宜の思慮をもそなえていたから、政府の職能を極大化することも極小化することにも賛成せず、慎重な中間的な立場をとり、つねに具体的な事例に即して処理することを提案した。古典派経済学の主流、スミス、リカード、J. S. ミルのどれをとってみても、経済問題は本質的に、増大不能な土地と増大可能な労働——資本は蓄積された中間財として労働のうちに包摂される——との対比として考察される。経済分析の機能は、労働力の質的量的変化が総生産高の増加率に与える効果を暴露することにあつた。生産高の増加率は資本に関する利潤率の関数と考えられていたから、要素価格と分配比率の長期的傾向は、経済過程の基本的要因として主役を演じた。

1870 年以降は、経済学者たちは一般に生産要素の供給は、分析視野の外の諸要因によって独立に決定されると考え、これをほぼ一定と前提するようになった。経済問題の本質は、一定の生産諸用役が競合する用途のあいだで最適——消費者の充足度を極大にするという意味で最適——の効果で配分される諸条件を探求するということになったのである。こうして経

経済学ははじめて、真の意味で、一定の目的と選択的用途をもつ一定の希少手段との関連を研究する科学になった。「新しい経済学」のマルサス人口論に対する態度のうちにみごとに示されている。限界分析の登場とともに、マルサス理論は経済学から退場した。だがそれは経済学者たちがマルサスの理論を信用しなくなったからではない。それにもかかわらず、新しい経済学において、人口増加は外生変数とみなされたのである。ジェヴォンズもいったように、「経済学の問題」とは、「さまざまな欲求と生産能力とをそなえ、一定の土地と他の物的資源とをもっている一定の人口が与えられていれば、必要なものは、生産物の効用を極大化するようなかれらの労働の使用法」であった。

ジェヴォンズの『原理』は、ケインズによれば、「経済学に関する最初の近代的な書物として、…すべての聡明な人たちに、異常に魅力のある」ものとなった。「主観的評価と限界原理、いまでは周知となった経済学上の代数や図形の技法とに基づく価値の理論を完成された形で初めて提示した論著である。…単純で明快で、断固としており、マーシャルが真綿でくるむような言い方をしたのに対して、それは石で刻んだように輪郭が鮮明であった。」

## 参考文献

- *Papers and Correspondence of WILLIAM STANLEY JEVONS*,  
vol. I, 1972 (edited by R. D. COLLISON BLACK and ROSAMOND  
KÖNEKAMP)  
vol. II, 1973 (edited by R. D. COLLISON BLACK)
- ジェヴォンズ (小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳 寺尾琢磨改訳)『経済  
学の理論』昭和 56 年、日本経済評論社
- 井上琢智『ジェヴォンズの思想と経済学—科学者から経済学者へ』  
1987、日本評論社
- 大野信三『現代経済学史』昭和 39 年、千倉書房
- 大野信三『経済学史』下、昭和 63 年、創価大学出版会
- M. ブローグ (杉原四郎・宮崎犀一訳)『経済理論の歴史 II』昭和 59  
年、東洋経済新報社
- マーク・ブローグ (中矢俊博訳)『ケインズ以前の 100 大経済学者』  
1989、同文館
- J. M. ケインズ (大野忠男訳)『ケインズ全集』(第 10 巻「人物評伝」)  
昭和 55 年、東洋経済新報社
- リチャード・ギル (久保芳和訳)『経済学史』1969、東洋経済新報社